

歓迎の言葉



総長・学長

ながい
永井
かずゆき
和之

新人生諸君、君たちを心から歓迎する。君たちの母校となる中央大学は、今年125周年を迎える。その歴史を先ずは知って欲しい。そして、これからの125年の新しい中央大学の歴史を創って欲しい。その

の新しい歴史は、入学したその日から、君たち一人一人の歩む日々によって創られていくものである。君たちが素晴らしい充実した学生生活をおくれば、それだけ輝かしい歴史が創られるであろう。

昨年秋に訪ねたイギリスのオックスフォード大学は創立800年を迎えていた。その卒業生代表として挙げられていたのは、万有引力のニュートンであり、進化論のダーウ

インであり、そして失樂園のミルトンであった。このように世界で誰も知らない人がいないという卒業生も誇らしい。そんな人物になつて欲しいと願う。

しかし、他方では、そのような世界的に有名ではない、人類の文化や科学の発展に寄与したわけでもない、しかし、周囲の人に人間として尊敬され、愛され、そして、自らも他人を尊敬し、愛した素晴らしい人々も誇らしい。そんな学生、そして卒業生がたくさんいることも輝かしい本学の誇りだと思う。そんな素晴らしい先輩が登場するのが、門田隆将著『康子十九歳 戦禍の日記』（文藝春秋刊）である。この著者も本学の

卒業生であるが、この本には中央大学予科の学生達が登場する。その中には学員体育会会長である高木丈太郎先輩（本学理事）もおられる。また、本学学生歌ともいべき惜別の歌の誕生秘話が窺える箇所もある。しかし、それ以上に、太平洋戦争という状況下の勤労奉仕に動員されているという中でも、一日一日を精一杯誠実に生き、社会の現実には正面から向き合った先輩が、そして、静かで大変熱い生き様を示してくれている先輩が描かれている。これは真実の話である。

1885年英吉利法律学校として創立された本学の建学の精神は『実地応用の素を養う』ということであった。このような建学宣言を發した創立者達の学んだ学校の一つであるイギリスの法曹養成機関であるミドル・テンブルが400周年であることから、昨年秋に訪問した。その図書館の2階には増島六一郎初代英吉利法律学校校長の写真が飾られていた。

本学の創立に参加したうちの4名が学んだのがミドル・テンブルである。彼らはほぼ3年でイギリスのパリスターの資格を取っている。その

猛烈な向学心は、ひとえに自己の立身出世だけを考えたものではないことは、その後の創立者達の生き様が示している。

そんな本学が、昨年、清永聡著『気骨の判決―東條英機と闘った裁判官』（新潮社、後にNHKでドラマ化）で、東條英機と闘った裁判官として紹介された吉田久裁判官（本学卒業生・晩年本学法学部教授）を輩出したのも、偶然ではないと考える。森戸辰夫事件において、学問の自由、大学自治の論陣を張った大正デモクラシーの代表的な論客である長谷川如是閑も本学の卒業生である。これは本学に脈々として流れる質実剛健という校風が、実地応用の素を養うということと相まった結果ではないかと考えている。

君たちが、これからの学生生活を悔いなきものとするを願っている。そして、それは将来の君たちの人生に繋がる生き方である。学生生活の結果は、将来の君たちの人生を左右することを心に留めて、精進して欲しい。君たち全てが、本学の誇るべき卒業生に続くことを期待している。